



# ふじのくにから 世界へ!

静岡県には世界に誇りうる自然、文化、産業などの資産が豊富にある。その魅力あふれる資産を最大限に活かして富国有徳の理想郷“ふじのくに”を目指す静岡県の「今」を紹介する。

## 幕末の技術水準の高さを物語る歴史的建造物「葦山反射炉」

人々の思いと“ものづくり”の源流

伊豆の国市にある葦山反射炉が「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として世界遺産に登録された。地元はすでに多くの観光客でにぎわっているが、その魅力と資産価値を守りながら、持続的に世界へアピールしていくために、関係者は次のステップを見据えている。

江戸末期、鉄製大砲鑄造を目的とした反射炉は日本各地で建造された。しかし、大半は役割を終えるとともに解体され、実際に稼働した反射炉で現存するのは葦山だけだ。保存状態も良い。背景には建造に奔走した当時の葦山代官・江川英龍に対する地元の人たちの敬愛がある。英龍は管轄地のために尽力した名代官で、民衆から「世直江川大明神」と称えられた人物。そのため英龍が残した反射炉に対する地域住民の思い

は強く、明治後期から平成に至るまで継続的に保存修理が行われてきた。伊豆の国市の観光文化局で葦山反射炉を担当する秋山貴宏さんは「世界遺産登録の目的はまず保全。背景にある地元の思いを継承しながら、反射炉本体の劣化を防ぐとともに、次代を担う子どもたちへの教育にも力を入れていきたい」と語る。

葦山反射炉の価値は、製砲工場という産業システムの痕跡によって日本の製鉄技術の黎明期を知ることができる点だ。建造に携わった職人の技術力も評価に値すると言われる。その視点に立つと“ものづくり県静岡”の源流が見えてくる。反射炉の周辺に息づく歴史や文化とともに、ダイナミックな自然「伊豆半島ジオパーク」の魅力も噛み合えば、伊豆地域全体の魅力を世界へ向けて発信することも可能だ。

葦山反射炉は江戸時代末期の技術水準の高さを物語る象徴だ。結果

的に反射炉は、完成後7年でその使命を終えるが、英龍の功績は、地元住民たちの反射炉の保護活動を通じて語り継がれている。そして建造から約160年を経て、世界遺産に登録された。この世界の宝を守り継承していくとともに静岡の魅力が国内外へ発信する時がやってきた。



江川英龍の暮らしぶりや業績を展示する江川家住宅。反射炉とは切っても切れない関連施設だ。



連双2基4炉からなる葦山反射炉。空に向かってそびえる姿に未来志向を感じる。